

スポーツ×データ アスリートサポートセンターの取り組み

谷口 剛志^{1), 2)}

¹⁾鍼灸学部, ²⁾Medical Athletic Trainer/Athlete Support Center 担当

IoT(Internet of Things)の発展により, アスリートのコンディションやパフォーマンスはビジュアル化・可視化され, これまで経験的・感覚的に行われてきたサポートの量・質が変化してきている。

本学においては2018年よりUNIVASから紹介された“ONE TAP SPORTS”システムを試験的に導入し, 主にアスリートサポートセンターで選手の傷害情報を一元管理, さらにコンディショニングやトレーニング情報なども共有できる機能が追加され, 2020年より全強化指定クラブに導入している。

今回のシンポジウムでは実際の導入例を御紹介し, スポーツ×データを用いた本学が目指すアスリート支援体制について述べさせていただきます。

真の動作解析によるアスリートサポートの可能性

木村 篤史

保健医療学部

陸上競技の男子100m世界記録保持者であるウサイン・ボルト選手は, スタートの一歩目着地までの股関節の屈曲運動に内旋運動を伴っていた。ボルト選手のコーチは「膝下が外を向いている。頭でコントロールしろ。」と内旋運動を動きで修正するように指導した。股関節の屈曲運動に内旋運動を伴っていた理由は何か? 実際の動きと脳内のbody imageの不一致なのか, 股関節周囲の筋力あるいは筋緊張の不均衡なのか, その理由は色々と推測されるがボルト選手のphysical assessmentを行ってみないと不明である。

“動作解析＝動作を捉えること”と認識されがちであるが, 真の動作解析はその動作が生じている理由について, 動作を捉えた上でアスリートのphysical assessmentの情報を重ねて「考える」ことである。真の動作解析によるアスリートサポートの可能性についてご提示したい。